

ピアノ学習プロセスの表出化

— SCATによる振り返り記述の質的分析 —

Externalization in the Process of Learning the Piano
Retrospective Description Using SCAT

田中功一(立教女学院短期大学)、小倉 隆一郎(文教大学)
鈴木泰山(株ピコラボ)、辻 靖彦(放送大学)

Kouichi TANAKA(St. Margaret's Junior College), Ryuichiro OGURA(Bunkyo University)
Taizan SUZUKI(Picolab Co., Ltd.), Yasuhiko TSUJI(The Open University of Japan)
(キーワード)

ピアノ指導、ピアノ初心者、保育者、質的研究、SCAT

1. ピアノ学習プロセスについて

ピアノ演奏見える化ツール(以下、VSPPとする)では、曲の楽譜情報、指導教員の演奏MIDIデータ、学生の演奏MIDIデータの3つのデータにより、演奏のテンポ、リズム、音の強さ、音の長さの様子をWebブラウザ上にグラフで示すことで、学習者は自身の演奏状況を教員と比較して把握できる。VSPPから表示されたグラフと録音データは、タブレット上のデジタルノートに保存される。学習者はグラフを見て演奏状況について感想を記述し学習を振り返りながら進める。(田中, 小倉, 鈴木, & 辻, 2015)。このVSPPを中核として、2017年に「ピアノ学習プロセス」Piano Learning Process(以下、PLPとする)を構築した。PLPの構成は、1)教員の模範演奏動画を主要コンテンツとするデジタル教材による自学自習、2)教員が行う個別対面指導、3)学習者が演奏を録音して聴く振り返り、4)VSPPによる演奏グラフのフィードバックによる演奏状況の把握、以上から成る。1)~4)の順に繰り返して学習を進める点に特徴がある。

2. PLPの実施方法

PLPの実践は2017年5月から3カ月間、短期大学の1年生11名に対して行われた。参加者はPLP

の構成で述べた2)-3)-4)の直後に感想をWeb入力により記述した。今回は11名の中から参加回数が最も多く、かつ課題曲を最も多くこなした学生の感想記述の分析を試みた。この学生は5/16から8/2の間に計11回参加し、Beyer No.9から開始してNo.104まで進んだ。

学生の感想記述をSCAT(Steps for Coding and Theorization)(大谷 & Otani, 2007)を用いて質的データ分析を行った。SCATの手順により<1>テキスト中の注目すべき語句、<2>テキスト中の語句の言い換え、<3>前述を説明するようなテキスト外の概念、<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念、<5>疑問・課題を導いた。<5>はコードではなく、4ステップ・コーディングは厳密には<1>から<4>と定められている。<1>から<4>のコーディングを全て行った後、<4>を紡いでストーリーラインを記述する。

3. SCATでの分析手続き

学生は5/23の感想記述の冒頭において「楽しかった。音が強くなっちゃっているところが分かった。」と書いた。SCATの<1>テキスト中の注目すべき語句の欄へ、「楽しかった。」、「音が強くなっちゃっているところが分かった。」を記入した。次に<2>テキスト中の語句の言い換えの欄へ、「個別対面受講の楽し

さ」、「音が強く出過ぎている部分を認識」のように前述の2つの語句を言いかえた。続いて、<3>前述を説明するようなテキスト外の概念の欄へ、「教育現場の持つ『本番感』を楽しめるマインド(特性)」、「『弾いた感』(結果)」、「音が強く出過ぎている部分の所在を認識(結果)」のようにテキスト外の概念を導いた。括弧を付けた(特性)、(結果)は<2>に記入した語句への関係を示す。さらに、<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念の欄へ、「個別対面受講による教育現場の持つ『本番感』への喜び」、「『弾いた感』」、「音が強く出過ぎている部分の所在を認識」のように前後や全体の文脈を考慮する。この<4>を紡いでストーリーラインを作り、最終的に理論記述を導く。

この手順で分析した結果、PLPの特徴として次の計18の理論記述を導いた。その一部を示す。

1) 個別指導において

- ・学生は初回の個別指導を体験することで「本番感」から「弾いた感」を得ることができ、その高揚感が自身に起こった演奏上の諸問題を冷静に受けとめるモチベーションとなり、継続的な練習意欲につながる可能性がある。
- ・学生は自分がすでに把握していた問題を教員から指摘された際に、問題意識をもって改善方法を知ろうと意欲を示すことがある。

2) 録音を聴いて

- ・学生は演奏が改善した状況を実感することで、さらなる練習意欲を得ることがある。
- ・学生は録音前に弾いた過去の演奏の記憶をたどり、録音の演奏を比較することができる。
- ・学生は録音前に漠然と捉えていた演奏に対して、左手と右手固有の問題へ分解して問題把握をすることがある。

3) グラフを見て

- ・学生は音量の問題が左手の問題なのか右手の問題なのか、模範演奏と比較して理解できる。
- ・学生は自身のグラフが教員の模範演奏に近づいた際に演奏の改善を実感することができる。

4.まとめ

PLPによる学びの特徴を5点示す。1)学習者が学びの当事者となることがある、2)振り返りの状況の違いにより振り返りの観点が変容することがある、3)振り返りが進む中で自身の感情の働きの変容を把握することがある、4)演奏の問題の所在を音楽の技術要素別に把握することがある、5)学生の学びの変容に伴い、教員の個別指導の態度が変容することがある。

参考文献

- 大谷 尚, & Otani Takashi. (2007). 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学, 54(2), 27-44.
- 大谷 尚. (2011). 質的研究シリーズ SCAT:Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法. 感性工学, 10(3), 155-160.
- 田中 功一, 小倉 隆一郎, 鈴木 泰山, & 辻 靖彦. (2017). ピアノ初心者の自学自習における演奏見える化ツールの導入について. JMSME 音楽教育メディア研究 第3巻, 3-4.
- 田中 功一, 小倉 隆一郎, 鈴木 泰山, & 辻 靖彦. (2015). 保育者養成課程のピアノ初心者を対象とした演奏見える化ツールの活用実践—バイエル9番の演奏改善を目的として. 電子キーボード音楽研究, 10, 3-12.